

項羽と虞氏の悲話

小田 幸子

等がある。以下(㉑)～(㉒)、の説が、A～Dの諸説とどの程度一致するかを検討しつつ、A項羽Vの典故について若干の考察を試みることにしたい(〈朗詠注〉は、覚明作『和漢朗詠集私注』、寛文十一年北村季吟刊『和漢朗詠集註』、国会図書館蔵『和漢朗詠註』、内閣文庫蔵『和漢朗詠集抄』を参照した)。

(㉑)は、A～Dのいずれにも一致する説が無く、多くは虞氏の最期に関する記述を欠いているが、Bの内閣文庫本は「又、美人ヲ敵ノ手ニ渡サンモ無念ナリトテ、虞氏ヲモソコニテ殺シ玉フナリ」と言い、Dは「虞氏悲ミニ堪兼テ、則自剣ノ上ニ伏シ、項羽ニ先立テ死ニケリ」(巻九。巻二十八も同趣旨)と、虞氏の自害の様を伝えている。

謡曲では、投身した虞氏を、項羽が「ホコノ先にてさがす」(『元龜・慶長能見聞』)ハタラクキ事が後場の重要な見せ所となっている。下間少進によると、これは、死骸を探す所作ではなく、「グシガ身ヲ投タルヨトメヲサスヨセイ」(東北大学蔵『秋田城介仕舞付』)だと言いが、いずれにせよ、高樓の上での矛を使用したハタラクキ事は原作以来の構想であることが推測され、その場合Dのように「剣ノ上ニ伏シ」たのでは都合が悪いわけである。

一方、Dの部は、謡曲の「虞氏は思ひに

(㉑)に関しては「項羽」雑記」なる伊藤正義氏の論考があり(『かんのう』55年5月)、

愛馬を「望雲驢」とする説が神宮文庫の『胡曾詩抄』(源恵法印注と伝える。唐の胡曾が歴史上の著名な地に関して詠じた詩の注釈書)などに見えることを指摘した上で、「漢楚合戦譚が、漢書や史記等の史書だけではなく、このような詠史詩およびそれに附された注を合わせて受けとめられていた」と述べておられる。その『胡曾詩抄』の「烏江」と題する詩の注釈(A)に、(㉒)と近似する記述がみえることも、右の伊藤氏の説を裏付けるが、漢楚合戦譚、就中「四面楚歌」のエピソードは、このほかに、先述した広相の詩句に関する『和漢朗詠集』の注釈書の所説(B)、平重衝と千手の物語の中で、重衝が詠じた広相の詩を解説する『平家物語』諸本の話(C)、

『太平記』巻九八上主々皇御沈落事Vに引用する該下の歌の説話と巻二十八八慧源禅巷南方合體事付漢楚合戦事Vの長大な挿入説話(D)

『史記』(項羽本紀)の項羽と高祖の合戦譚の中で最も著名なのは「四面楚歌」のエピソード——垓下に退いた項羽の軍を取り囲んだ漢の軍勢が楚の歌を歌うのを聞き、項羽は、愛妾虞氏と愛馬騮に託して身の不運を悲嘆慷慨する詩を詠じた——であろう。『和漢朗詠集』には、このエピソードを題材とした橋広相の「燈暗うして数行虞氏が涙 夜深けぬれば四面楚歌の声」なる詩が収められているし、軍記物語にも取り上げられて、我が国でも大いに広まった話である。謡曲(項羽)も、虞氏との別離から項羽が自決するまでを主たる素材として構想されているが、そこには原典たる『史記』に存在しない次の如きモチーフ、および相違が認められる。

- (イ) 項羽の愛馬の名を「望雲騮」とする。
- (㉑) 虞氏が烏江に身を投げる。
- (㉒) 虞氏の死骸をこめた塚から生じた草を、「美人草」と言う。
- (㉓) 項羽の兵が心変りして高祖に属した。

堪へかね、いかゞハせむと伏し給う(下間少進手沢車屋本。濁点と漢字を宛てた。以下の引用も同じ)との文言と近似しており、またABCに無く、Dの巻二十八に記す呂馬童のエピソードを謡曲が採用する(この話は『史記』にもある)など、Dと謡曲の関連が窺れる。以下ではなく烏江で投身自殺をした説がほかにあるのかもしれないが、Dに基いて謡曲作者が改変した可能性も考えられる。

ワキを草刈男とし、シテが船賃に美人草を所望するという前場の構想の基盤となっている(の)説も、AとDには存在しない。これについては、宋の曾鞏作「虞美人草ノ詩」の一節に「三軍ハ散ジ尽シテ旌旗倒レ、玉帳ノ佳人ハ坐中ニ老イタリ、香魂ハ夜ニ劍光ヲ逐ウテ飛ビ、青血ハ化シテ原上ノ草ト為リヌ」とあって、虞氏の血が化して草となった説話を伝え、南北朝(室町時代の僧侶隱慧(インヱ)はその詩集『南游稿』)の中で、「香草は年年墳上(フナト)生ずれども、虞姫の魂は断たれたりき楚歌の声に」と、右の説を踏まえた「虞美人草」と題する詩を詠じている。中国で形成された説話が室町時代には日本でも知られるようになっていたらしいが、謡曲は「美人草」とする点で相違し(項羽)の別名が「美人草」である(、これらとは伝承経路をやや異にするの

かもしれない。

(二)は謡曲に「項羽の兵ミな心がハリし、かへつて項羽をせめ奉る」「立あがりつ、味方を見れば、高祖に属して寄せくる浪の、荒き声々」(少進手沢車屋本)とあり、「漢皆已得楚乎。是何楚人之多也」との『史記』の記述と相違が認められる。謡曲に最も近いのはAの次の如き所説である(該当箇所のみ漢文体を訓み下し文に改めて引用した)。

漢ノ兵已ニ四面ヲ圍ム。夜軍人ノ歌ヲ聞ケバ、楚人歌ノ声也。項羽ガ領スル楚國ノ兵、已ニ皆漢ニ属シテ敵ト成ル間、楚歌ノ声四面軍中ニ満ミテリ。項羽之ヲ聞キ、今ハ憑ム所無シトテ烏江ニ向テ：

Bの内閣文庫本やCの『源平盛衰記』では自らの軍兵が漢に従ったと思ひ込むのだが、右ではそれを事実としている点で謡曲と一致するのである。

ただし、上掲り系統の(項羽)の最古本である淵田虎頼等節付本や、これと同系統の妙庵玄又手沢五番綴本では「語り」の内容がかなり異り、「さても項羽高祖の戦ひ、七十余度に及といへども、つゝにハ項羽討負け給ひ、諸從眷属皆落ち失せて、残りともまる物とてハ、虞氏といへる后、望雲驪と言ふ馬一疋、

此馬ハ一日に千里をかける名馬なれども：」(妙庵本)と、現行観世流や下掛り系統諸本とは異なるうえ、AとDにも類のない記述を持つ点で問題が残る。

以上の如く、謡曲(項羽)は、原曲たる『史記』に直接依拠したのではなく、『太平記』や『胡曾詩抄』などを通じて窺われる項羽と虞氏の悲話に基くことが推察されるが、(二)をすべて有する如き説話が存在したのか、謡曲作者が諸説を適宜取り合わせたものかは明確でない。ただ、様々な異説が存在する項羽関係の諸説を取捨選択し、後場に登場した男女二人が過去を再現する古作執心能以来の構想を踏えつつ、愛する女を死なせてしまった項羽の怒りと嘆きという主題にまとめあげたところに作者の手腕が認められると言えよう。

もとより、多種多様な項羽関係説話のごく一部を比較したに過ぎず、残された問題は少なくない。大方の御教示を願う次第である。(小稿に関して、西脇哲夫氏より多くの御教示を得た。記して感謝する。)

(武蔵野女子大学講師)